

博士学位論文審査要旨

申請者	西野厚志	
論文題目	山田孝雄・谷崎潤一郎の研究——現代語訳「源氏物語」を媒介として——	
申請学位	博士（学術）	
審査委員		
主査	千葉俊二	早稲田大学教育・総合科学学術院教授
副査	石原千秋	早稲田大学教育・総合科学学術院教授
	陣野英則	早稲田大学文学学術院教授
	東郷克美	早稲田大学名誉教授

1、本論文の目的と構成

本研究は、戦前・戦後を通して三度もおこなわれた谷崎潤一郎の現代語訳「源氏物語」を端緒に、〈近代〉という時代を日本という場所で生きざるを得なかった山田孝雄というひとりの国文学者と、数々の境界を越えながら、絶えず変貌を遂げつづけた谷崎潤一郎という文学者を通して、古典の現代化という問題を考察することを目的としている。〈翻訳〉という越境的な行為を中心に論じながら、〈東洋／西洋〉、〈伝統／近代〉、〈言語／映像〉間の越境を試みた論文でもある。

本論は三部構成の全十章からなっているが、近代における「源氏物語」受容を論じた第二部「問題としての『源氏物語』」を中心に、「谷崎源氏」の校閲者山田孝雄を論じた第一部「山田孝雄論」と、翻訳者谷崎潤一郎を論じた第三部「谷崎潤一郎論」を前後に配する構成になっている。具体的には、まず「谷崎源氏」の校閲者で、当時国粹主義者として知られていた国語学者の山田孝雄の著作を検討し、これまでまともに論じられることもなかった、その「文法論」と「国体論」に表現される思想の内実を明らかにしている。そして、次にその思想に淵源する山田孝雄の「源氏物語」に対する校閲方針について検証を加えながら、「谷崎源氏」の検閲・削除問題を論じてゆく。さらに最後にその延長上に、古典受容や映画製作などの作家的な遍歴を背景としながら、谷崎潤一郎のテキストに見られる細かな表現特質の読解を通し、その現代性を探り論じている。

目次によって全体の構成を示せば、以下の通りである。

序章 越境する谷崎潤一郎

- 一、「谷崎潤一郎パリ国際シンポジウム」印象記
- 二、「谷崎源氏」研究の現在
- 三、「谷崎源氏」と「細雪」を巡って
- 四、〈美学／政治〉の関を越えて
- 五、本論全体の構成について

第一部 山田孝雄論

第一章 〈汚名〉を返す—山田孝雄の思想における〈統覚〉の位置—

- 一、汚辱に塗れた国文学者の生
- 二、山田思想の根本義
- 三、〈統覚〉とは何か
- 四、山田孝雄とは誰か

第二章 有機的〈国体〉と有機的〈文体〉の誕生

- 一、山田孝雄の身体論的国家観
- 二、山田孝雄の身体論的言語観
- 三、身体内部にある「特別の機能をなす本體」
- 四、国家身体と文の身体への〈ファルス〉の挿入

第三章 言文一致の〈残りの物〉

—山田孝雄の「存在詞」と谷崎潤一郎「のである口調」—

- 一、山田孝雄は『文章読本』を読んだか
- 二、言文一致再考—「た」文体説から「である」文体説へ
- 三、言文一致の〈歴史の終わり〉
- 四、山田孝雄の「存在詞」と谷崎潤一郎「のである口調」
- 五、反復するファルスの意味作用

第二部 問題としての「源氏物語」

第一章 灰を寄せ集める—山田孝雄・谷崎潤一郎訳「源氏物語」論—

- 一、物語の幕開け
- 二、灰を掻き集めるように
- 三、「源氏物語」というアポリア
- 四、「旧訳」における〈抑圧〉と〈排除〉
- 五、物語を「削ル」のはダレか
- 六、物語の結び目をほどく
- 七、灰を撒き散らす—物語の果てに—

第二章 「源氏物語」を読む本居宣長／ポルノグラフィを読む山田孝雄

- 一、「源氏物語」を読む本居宣長
- 二、本居宣長を読む山田孝雄
- 三、「源氏物語」を読む折口信夫
- 四、ポルノグラフィを読む山田孝雄

第三部 谷崎潤一郎論

第一章 Lost in Transformation

—谷崎潤一郎訳「源氏物語」の〈女にて見る／女性への生成変化〉—

- 一、〈翻訳者〉の条件について
- 二、女に成る潤一郎
- 三、「国生み神話」のオカマを掘る
- 四、「男〈である being〉こと」と「女〈になる becoming〉こと」

五、Translation←→Transformation

第二章 日本におけるヴァイニング受容—芥川龍之介・谷崎潤一郎作品を中心に—

- 一、オットー・ヴァイニングについて
- 二、日本におけるヴァイニング受容
- 三、ヴァイニングの二つの読み方
- 四、おわりに—書棚の中のヴァイニング—

第三章 明視と盲目、あるいは眼の二つの混乱について

—谷崎潤一郎のプラトン受容とその映画的表現—

- 一、谷崎のプラトン受容について
- 二、洞窟の比喻と映画術
- 三、映画の物質的基盤について—燃え上がる基底材（フィルム）—
- 四、享樂の対象としてのフィルム
- 五、二種類の眼の混乱について
- 六、〈視覚の零度〉と全体主義

終章 越境する谷崎潤一郎再論

- 一、志賀直哉と谷崎潤一郎、そして『海辺のカフカ』
- 二、オイディプスからポスト・オイディプスへ
- 三、「源氏物語」を読むカフカ少年
- 四、震災、谷崎、カリガリ
- 五、本論全体の総括

2、論文の概要

序章「越境する谷崎潤一郎」

フランスで出版された、プレイヤッド版谷崎潤一郎集全二巻を契機に二〇〇七年三月、フランスで行われた「谷崎潤一郎パリ国際シンポジウム」の話題から、〈東洋／西洋〉〈古典文学／近代文学〉〈言語／映像〉といったさまざまな二項間の越境を演じる谷崎潤一郎の創作活動の可能性を提起する。さらに、近年盛んになりつつある「谷崎源氏」研究と、検閲制度からの谷崎作品の再検討という問題を接続して、〈抑圧者／被抑圧者〉という図式による事態の把握の妥当性に疑義を呈し、本論全体の序章としている。

第一部「山田孝雄論」

第一部では、「谷崎源氏」の校閲者山田孝雄の業績を概観している。国家と国語の誕生には相同性があり、〈国民国家（ネーション・ステイト）〉の成立に大きく寄与したのが、国民が共通に使用する均質な言語、すなわち〈国語〉の普及である。山田孝雄は日本語学の礎を築いただけでなく、大きな業績を各分野に残しながら、そのかたわら数々の要職を務め、社会的な影響力も強かった。しかし〈極端な国家主義〉的な著述・活動が災いして、戦後、公職追放処分を受け、そのために先行研究も少ない。その文法論と思想的側面との

全体像を総合的に捉えようとする研究はこれまで皆無である。が、国家の創立と国語の生成を同じ視野に納める観点からすれば、国語論の基礎を固め、国家論も多く残す山田孝雄の業績は、思想的な偏向があるにもかかわらず、昨今のナショナリズムをめぐる研究にも新展開を促すために再検討されるべきだという問題意識によって貫かれている。

第一章「〈汚名〉を返す―山田孝雄の思想における〈統覚〉の位置―」

本章では、山田思想の中心的概念〈統覚〉について論じている。国語学の伝統を体現する山田孝雄は、さまざまな領野で多くの業績を残しながらも、公職追放という汚辱に塗れた〈国粋主義者〉として、その思想の全容解明と本格的な批判はいまだなされずにいるのが現状である。鋭い問題提起を投げかけたイ・ヨンスク『「国語」という思想』も、山田を批判的に裁断することに性急な余り、文法理論書を充分には参照していない。

本章では、富山市立図書館山田孝雄文庫での調査をもとに鍵概念である〈統覚〉に着目しながら、その思想の核を論じている。〈統覚〉とは、諸要素をまとめ上げる、単なる要素の〈総和〉ではなく、一つの有機的な〈全体〉を構成する作用のことである。文法論では、複数の語から〈文〉という単位を構成する、その作用を純粹に表象するのは〈である＝存在詞〉という語ただ一つとされる。また国家論においても、国民や領土といった諸要素を一つの〈国体〉という全体性へと構成する〈統覚〉は〈天皇〉だけが宿すとされる。旧蔵書を調査した結果、その内容や書き込み等から判断して、〈統覚〉がカント哲学の〈超越論的統覚〉を参照していること、西洋哲学から導入された概念がその思想の中心にあることを実証した。〈統覚〉という概念に注目すれば、これまでのように山田孝雄の思想を〈西洋／日本〉や〈近代／伝統〉といった単純な二項図式から、単なる狂信的な国粋主義者として批判することはできなくなる。山田が体現する思想は、〈近代性（モダニティ）〉の分身、あるいは〈亡霊〉なのだとして、山田を裁断する際にともすれば用いられがちな〈伝統／近代〉という図式から逃れ、〈野蛮〉に対して自ら〈文化〉の側に立てば批判しうると考えるような啓蒙的言説の不毛性を炙り出す。

第二章「有機的〈国体〉と有機的〈文体〉の誕生」

本章では、山田孝雄の国家観と言語観の共通点を身体論的な視点から検討している。山田の国家論と国語論は発表された時期が重なるだけでなく、人体の比喻を用いて国家体制とその使用言語を正当化するなど、内容においても類似点が見られる。山田の理論では、〈自然〉な存在である人体と類比的に想像される国家や言語が、各部位が緊密に連絡しあうような有機的なものとされる。そして、そのなかで起きる異常な事態は人体における変調と同様に捉えられ、あくまで例外的な状態として処理される。国家や言語を所与としての身体に根拠を求めたうえで、いかにして山田は、社会的な構築物である国家や言語を自然化していったか。〈大逆事件〉をめぐる同時代言説から、山田の国家論と文法論を照射してゆく。

北一輝は『国体論及純正社会主義』で、天皇が統治権を有するという有機的国家論者は憲法の本義にもとる「復古的革命主義」者であり、彼らは「其の頭蓋骨を横ざまに万世一系の一語に撃れて白痴とな」っていると、当時の国家有機体説を批判する。その国体論において国家有機体説を主張する山田は、〈全体〉性を思考する理性は、その本性上それ以上の基礎付けを必要としない〈絶対者〉を見出すとする。「どんな哲学者も、近世になつては大抵世界を相待に見て、絶待の存在しないことを認めてはゐるが、それでも絶待があ

るかのやうに考へてゐる」（森鷗外「かのやうに」）と、森鷗外がファイヒンガーを経由したカント哲学で〈大逆事件〉に応答したように、山田孝雄もカントから〈統覚〉を導入して対応している。つまり、鷗外が〈かのやうに〉と答えたのに対して、山田は〈ねばならない〉と応じたのである。この〈ねばならない〉という当為は、論理の内在的な限界に対応するための超越論的要請なのであって、論理の飛躍ではない。〈身体〉の比喻と〈全体〉性への志向は結び付けられ、〈自然〉な所与である人体との類比で理解される〈自然〉化された社会は、有機体として機能する。その組織のなかでは個々の部位は全体に奉仕するようにして動員され、相応の役割を果たすことが〈正常〉な機能で、もし社会全体の利益に敵対するような個人・思想・行動が顕現した場合、それは身体の異常、〈病〉として想像されることになる。

第三章「言文一致の〈残りの物〉——山田孝雄の「存在詞」と谷崎潤一郎「のである口調」——」

本章では山田孝雄の国家論・言語論を、近代文学が牽引した言文一致運動という流れのなかに位置づけることが試みられている。二葉亭四迷が言文一致で小説を書こうとして、最初は敬体で書いたがうまくいかず、結局常体を選択したという挿話は、近代小説成立の〈可能性の条件〉を規定しつつけている。言文一致運動研究の第一人者山本正秀をはじめ、野口武彦、柄谷行人など、〈言（音声言語）／文（書記言語）〉の重ね合わせが、文末表現に関わる問題だとする視座は広く共有されているが、山田孝雄がその鍵概念〈統覚〉を純粹に表象する語として設定した「存在詞（＝〈である〉）」という範疇と、谷崎潤一郎が近代化された〈国語〉を論じる際に標的にした「のである口調」の論じ方にみられる相同性から、日本語が有機的な体系として構築されて行く際、不可避に産出される〈剰余〉について論じている。

山田孝雄はその文法理論のなかで、〈統覚〉が宿る「存在詞」について、言語の「基本的形式的部分」でありながらも「言語といふ形式に於いては認めらるゝことなき」ものという二律背反した定義を与えた。谷崎潤一郎も日本語について述べながら、「のである口調」を、一方では文章の流れを切断して〈分離〉するものとしながら、他方では文章のリズム（切れ目）を接合して〈統合〉するものとして、矛盾した存在として捉える。文末詞〈である〉は、山田孝雄の「存在詞」同様、〈国語〉という有機体が排泄する逆説的な剰余、〈残りの物〉なのではないかと論ずる。

第二部「問題としての「源氏物語」」

第二部では、〈近代〉に〈伝統〉が継承される際に起こる問題について、近代以降の「源氏物語」受容を一例として論ずる。第一部で取り上げた山田孝雄が大きく関わったのが、「源氏物語」現代語訳という古典復興だった。「源氏物語」は成立より千年が経過、現在も、日本文化を象徴する代表的な古典としての光を失っていない。だが、「源氏」が読み継がれてきたその歴史は、栄光にのみ満ちていたわけではない。皇統譜の乱脈を物語内容として含む「源氏」が、戦時下の天皇中心の国家体制によって危険視されたのは当然のことで、皮肉なことだが、この毒にも薬にもなるような両面性が、「源氏」を今日においても読むに値する正典（カノン）としている。

第一章「灰を寄せ集める―山田孝雄閲・谷崎潤一郎訳「源氏物語」論―

本章では、山田孝雄が校閲を務めた「谷崎源氏」の成立過程について論ずる。書簡類や山田の蔵書への書き込み、関係者による証言などを使って、谷崎と山田との「源氏」をめぐるやりとりを概観し、山田による〈校閲〉の内実を、実証的な手法で明らかにしてゆく。一九三九年一月より刊行が開始された『潤一郎訳源氏物語』の作業・出版は、強まる戦時色のなか、「源氏」が日本文化の最大遺産として称揚され「正典（カノン）」化が進む一方で、皇統の乱れを物語内容として含むことから不敬文書として危険視されるという時代状況のなかでなされた。当時の風潮を凌ぐため、国粹主義者として名を馳せていた山田の名が掲げられることになったが、戦時下版「谷崎源氏」は削除処置を施しての出版を余儀なくされた。「谷崎源氏」の扉には「山田孝雄閲／谷崎潤一郎訳」とあり、ふたつの名前は同じ大きさで肩を並べる。『潤一郎訳源氏物語』が谷崎による作品であると同時に、当時の国文学界の権威山田孝雄の仕事でもあることを示しているが、谷崎は山田の仕事について次のようにいう。「その校閲は頗る厳密丁寧を極め、単に誤訳を訂正して下さるばかりでなく、文章上の技巧、表現の仕方等にまで周到な注意を与へられ、往々にして校正刷が真赤になったくらゐであつた」。残念ながら、この「校正刷」をはじめとする関係資料は戦火によって焼失してしまった。そのために作業の内実はずしも明らかではないにもかかわらず、削除処置はほとんど検閲に等しいような山田の朱筆によるという見方が現在までは定説となっていた。が、事態をこのように単純な〈抑圧者／被抑圧者〉という二項対立的な図式で理解することは可能なのだろうか。

この疑問を解消するために、「谷崎源氏」校閲の実態を捉える手がかりを求めて、校閲者山田の著作・旧蔵書等の収められた富山市立図書館山田孝雄文庫の調査を実施、金子元臣著『定本源氏物語新解』全三巻に朱筆で「削」の文字が書き込まれているのを発見した。戦前・戦後の両本文を校合することで洗い出した大小二〇〇箇所以上の削除箇所と比較した結果、「書き入れ」は削除箇所と合致、削除問題に関連する資料と判明。また谷崎が自己規制を行っていた証拠となる未発表山田宛谷崎書簡の存在が確認され、〈「削レリ」＝谷崎自身による削除箇所を指示する書き入れ／「削ル」＝山田による削除箇所を指示する書き入れ〉という公式も導かれて、訳者谷崎潤一郎と校閲者山田孝雄の「源氏」に対する認識の違いを浮き彫りにした。結論として、〈抑圧者＝山田孝雄／被抑圧者＝谷崎潤一郎〉という二項対立的な図式による問題の理解が無効であることを論証。「谷崎源氏」削除問題は、日本最大の古典さえ検閲の対象となって時代の闇をうかがわせるが、それは現在の我々の「物語」にも刻印されているのではないかという問題提起もおこなっている。

第二章「「源氏物語」を読む本居宣長／ポルノグラフィを読む山田孝雄」

本章では近代における「源氏」受容の諸相を、別の角度から追究している。皇統の乱れを描く「源氏物語」、それを〈もののあはれ〉という一語で肯定してみせる本居宣長の存在は一つの〈問題〉をはらむ。そこで「本居宣長」と「源氏物語」の組み合わせが引き起す係争を、山田孝雄と折口信夫がそれぞれ描く宣長像の差異を比較することで取り出し、〈問題〉としての「源氏物語」を再構成している。

本居宣長は、仏教的・儒教的な善悪を価値基準とする教戒の書としてではなく、〈もののあはれ〉を表現しえているかどうかという一点から「源氏物語」を読む。そこに〈もののあはれ〉を読み取り、正面から肯定する〈「源氏物語」を読む本居宣長〉は、国学にお

けるスキャンダルに他ならない。山田孝雄にとって本居宣長とは、〈大和心・道・国体〉の三位一体によって漢意を払い去ることに執心する存在で、「西洋魂」を駆逐する自らを重ねる同一化の対象だったが、「源氏」に関する態度は倫理的に認められないという厳しいものだった。宣長と「源氏」、この二つの対象は山田のなかで調和することはなく、同時代の空気が「源氏」よりも記紀万葉を歓迎したように、山田にとって宣長とは〈「古事記」を読む宣長〉だった。

その一方、折口信夫にとって「源氏物語」は日本文学の原型であり、至高の罪を犯すことによって放浪し、その後に最高の栄華を得るという〈貴種流離譚〉の典型である。その「源氏」に〈もののあはれ〉を見てとり、正面から肯定してみせる本居宣長こそ、折口にとっては慕わしい存在だった。たびたび接触しては、対立した山田孝雄と折口信夫が争ったのは、〈「古事記」を読む宣長〉と〈「源氏」を読む宣長〉のあいだを揺れる真の宣長像をめぐっての対立だったといえる。

第三部「谷崎潤一郎論」

第三部の「谷崎潤一郎論」では、〈古典回帰時代〉と呼ばれる時期の谷崎潤一郎の小説表現を検討している。山田孝雄に代表される国語・国家思想の検討を経たうえで、唯一の中心に支えられた均質な全体性を志向するようなその発想に対する、谷崎による〈抵抗〉の可能性を、「谷崎源氏」の翻訳作業の過程、あるいは古典を題材とした作品中「盲目物」と呼ばれるテキストに見られる表現特質のうちに探る。その半世紀以上の創作活動期間中、〈東洋／西洋〉〈伝統／近代〉〈言語／映像〉間の越境を繰り返し、変貌を遂げつづけた特異な作家の特質について論を展開している。

第一章「Lost in Transformation——谷崎潤一郎訳「源氏物語」の〈女にて見る／女性への生成変化〉——」

本章では「谷崎源氏」の成立過程を、校閲者山田孝雄と翻訳者谷崎潤一郎との関係を論じてきたこれまでの章から一歩踏み込み、具体的な表現特質と同時代言説の照合から、戦前・戦後の「谷崎源氏」のそれぞれの特徴を考察している。「源氏物語」特有の表現、女性美を借りて皇族の男性に聖性を付与する「女にて見る」という表現である。この「女にて」は、相手を「女にして」と自分が「女になって」という二つの解釈が可能である。山田の蔵書に残された校閲の痕跡、また國學院大學に移管された戦後版「谷崎源氏」関連資料などを参照しながら、新旧の訳文の具体的な細部を比較することで、「女にて見る」の一節をめぐる谷崎と山田による異なる反応と交渉の痕跡が確認できる。この表現を谷崎は〈女になる〉と訳出するけれど、戦時下版では山田の思想を反映して一度は抑圧され、戦後版で復活したようだ。この箇所には谷崎による抵抗点の一つがあるが、谷崎による抵抗の表現とは、〈女に成ってみること〉〈女性への生成変化〉による性的秩序の攪乱なのだと いえる。谷崎が多くの作品で性差を越境してゆく幻想を描いているのに対して、山田は有機的な身体をの喩を随所で用い、その発想は各部位が有機的に結びつく秩序を前提としており、身体は生殖を目的とした性差を基礎とする。安定した異性愛主義を正常とみなす山田にとって、谷崎の表現するような攪乱的な欲望は許容できないものだった。

第二章「日本におけるヴァイニンガー受容——芥川龍之介・谷崎潤一郎作品を中心に——」

本章では谷崎の〈生成変化〉をヴァイニングターの同時代受容と共鳴させながら、さまざまな形をとる様相を検証する。オットー・ヴァイニングターの『性と性格』は、その反ユダヤ的かつ女性蔑視的な傾向からナチスに利用された一方で、ヴィトゲンシュタインを魅了したことでも知られる。同書が日本でどのように受容されたのか。これまで個々の作家との関係で個別に論じられてはきたものの、どれほどの影響をふりつたのかを明らかにするような論考はなかった。だが、芥川龍之介・谷崎潤一郎をはじめとして、森鷗外や西田幾多郎、与謝野晶子、有島武郎・武者小路実篤らの白樺派から、和辻哲郎、萩原朔太郎、大岡昇平、三島由紀夫まで実に多くの作家が言及している隠れたベストセラーである。

ヴァイニングターには、二つの相反する思想が奇妙に同居する。その二律背反する読解可能性のうち、どちらを選択するかによって評者の立場が決定される。すなわち、男女の別は乗り越えがたい差異であるという〈性差の絶対化〉と、全ての男女は両性を併せ持つており境界は不確定だとする〈性差の相対化〉と。二極化するヴァイニングター評価の典型として、それぞれ芥川龍之介と谷崎潤一郎の作品を読みながら、同時代に開いていくことで、前者の女性嫌悪（ミソジニー）と後者の多様な性に対する肯定的姿勢といった作家の個別特殊な傾向が、広く同時代に共有されていたことを論証している。

第三章「明視と盲目、あるいは眼の二つの混乱について——谷崎潤一郎のプラトン受容とその映画的表现——」

本章ではプラトン哲学の受容と谷崎潤一郎が一九二〇年代に関わった映画製作の体験が、小説表現にどのように取り込まれたのかを、〈古典回帰時代〉の作品、いわゆる「盲目物」を中心に検討している。谷崎作品におけるプラトニズムの影響はつとに指摘されてきたが、谷崎が参照したという英訳プラトン全集 *The Works of Plato : a new and literal version, chiefly from the text of Stallbaum* (Henry Cary, Henry Davis & George Burges, 6 vols., Bohn's Classical Library, London : GEORGE BELL AND SON, 1887-1890.) の詳細については、これまで言及されてこなかった。プラトンの語る名高い〈洞窟の比喩〉と映画の上映形態の類似から、谷崎作品に見られるプラトニズムと映画的表现について考察している。

超歴史的な表象の様式としての映画と、経験的な水準で映画が受けることとなった物質的な制約、具体的には可燃性フィルムについての同時代言説を参照することで、谷崎の〈古典回帰〉以降の盲目を主題とする作品群が、過剰な光による〈視覚の零度〉に達するまでを追う。つまり谷崎の描く盲目とは、陰翳を深め行くために視覚を失うのではなく、極限まで視覚を酷使するために陥る状態であると結論づける。芸術が独自の表象形式を自己反省し、純粹化してゆく過程において、文学がページに還元され、映画がスクリーンを露出させるように、表象の零度に達することで、かえって似通ってしまうことがある。そしてそれが単に美学的な問題に留まらず、政治的な意味合いを帯びてしまうが、谷崎の越境が計らずも垣間見せる芸術間の類似は、表象が消滅した後に露呈する表象の条件にまで到達して、現代的な問題をも提起していると論ずる。

終章「越境する谷崎潤一郎再論」

村上春樹『海辺のカフカ』を傍らに置きながら、本論が論じてきた谷崎潤一郎のさまざまな越境の含みもつ現代性について論ずる。日本という場所において近代という時代を生きなければならなかった知識人の一典型としての山田孝雄、〈近代／伝統〉や〈美学／政治〉等の分割線が問題となる古典としての「源氏物語」、そして性差やメディア間の越境

を繰り返して生涯変貌を遂げ続けた谷崎潤一郎、この三者はいまなお重い問いを発し続けていると結論づけている。

3、総評

本研究の意義は、生涯において三度にわたっておこなわれた谷崎潤一郎の「源氏物語」現代語訳の問題を、谷崎文学の問題系においてばかりでなく、校閲にあたった国文学者の山田孝雄という視点を取りこむことによって、これまでの研究とはまったくレベルを異にした幅の広がりと大きさをもつ点にある。本論文の中心部分はすでに修士論文の段階で提示されていたものであるが、その論文は二〇〇六年五月三十一日、および六月一二日の「朝日新聞」の文化欄に二度にわたって取りあげられた。そのことによってこの研究の卓抜さと今日的な状況へ投げかける問題の重要性が証されているといえる。

本研究は、その修士論文を発展させるかたちで、第一部で国文学者山田孝雄の文法論と国体論の結びつきを論じながらその思想的な構造を明らかにし、近代における「源氏物語」という古典受容の問題を掘りさげる一方、そこからなお翻訳者としての谷崎潤一郎のテキストを新たな視点から論じている。時間のかかる丹念な実証的な調査をベースにしながら、しかもラカンやドゥルーズ、デリダなどの現代思想の理論をも十分に咀嚼し、実証と理論とを見事に融合させ、近來稀にみるすぐれた論となっている。第二部の「源氏物語」受容を論じた箇所はすでに「源氏物語」研究書に掲載されて、学会からも注目されて高い評価を与えられているが、第一部の山田孝雄論、第三部の谷崎潤一郎論の一部も全国的な規模の学会で研究発表されたり、学会誌に掲載されたりして、その都度高い評価を与えられてきた。

本研究はこうした大きな意義をもち、学会でもすでにその評価は定着したものとなっている。参考文献の提示の仕方やときにレトリックに流れて意味の取りにくい箇所が二、三あったことが問題点として指摘されたが、もちろんそうしたことは本論文のもつ大きな価値を左右するものではなく、審査委員一同、本論文が「博士（学術）」を授与するに十分値するものであるとの結論に達した。ここに報告する次第である。